

「次郎物語」を読む前後に一連の態度テストを行ないこの前後のテスト得点の変化から、読書による態度の変容を調べた。中学生50名のV_pの集結は、次の通りである。

(第I部の1) 日常場面における道徳的行動傾向の5段階評価——全体としては、前後テスト間に変化がない。しかし、次郎的な行動である問3(みんなが規則を破つても自分は……)と、問3(いじわるな子でも困っているときには……)とは、より道徳的な方向に変容し問8(お金を落して叱られる時にも……)は逆である。

(第I部の2) 10種の親の型に対する愛情観の五段階評価——全体としては変容がないが、問3(お民型——厳格型)、問10(正木の祖父型)、問7(お浜型——盲従型)は、より高い評価に変容している。もつとも、前後テストを通じて、祖父型の評価の高い型であり、お民型は低く、お浜型はその中間である。

(第II部) 父、母、きょうだいのそれぞれに対する態度スケール点は母と父の場合は態度が後テストにおいてかなり好転したが、統計的には有意な差はない。

(第III部) 危機的場面テストにおける6種の行動の型とその行動原理——後テストにおいては合理的目的追求型に反応が増大し目的放棄型や目的転換型は反応がやや減少した。前後のテストを通じ、合理的目的追求型と目的転換型は反応数をもつとも多い。

新入学児童のかな文字習得過程の研究

早稲田大学 三島二郎・○富田達彦・小林マユミ

小学1年のかな文字習得を同一被験者について1年間毎月調査した(都市98名、農村109名)。調査序数をN、テスト成績を%で示すと各群の習得曲線は左の表の如くなる。各群間の差は下の如し。特に著しいことは、4月の習得率は都市が高い(cが大)が、5月以後の上昇率は逆に農村がよい(iが大)らしい。

		$A \cdot (1 - 10^{-b/N})$	$A - (A - C)10^{-i/(N-1)}$
清	読	都市 $100(1 - 10^{-.22/N})$	100 - (100 - 67) $10^{-.13/(N-1)}$
	書	農村 $100(1 - 10^{-.16/N})$	100 - (100 - 34) $10^{-.16/(N-1)}$
音	読	都市 $100(1 - 10^{-.18/N})$	100 - (100 - 56) $10^{-.13/(N-1)}$
	書	農村 $100(1 - 10^{-.14/N})$	100 - (100 - 22) $10^{-.15/(N-1)}$
濁	読	都市 $100(1 - 10^{-.18/N})$	100 - (100 - 52) $10^{-.07/(N-1)}$
	書	農村 $100(1 - 10^{-.07/N})$	100 - [100 - (-3)] $10^{-.12/(N-1)}$
音	読	都市 $100(1 - 10^{-.08/N})$	100 - (100 - 34) $10^{-.09/(N-1)}$
	書	農村 $100(1 - 10^{-.08/N})$	100 - [100 - (-7)] $10^{-.11/(N-1)}$

〔都市>農村〕 清・読、濁読…5%差

濁・読…1%差、清・書…差なし

〔読み>書き〕 清・農、濁・都…1%差

清・都…5%差、濁・農…差なし

〔清音>濁音〕 都・読、都・書、農・読、農・書…1%差

又、早生れと遅生れに大きな差はない。IQが高ければ(低ければ)文字習得がよい(悪い)が、逆はいえない。向性検査との相関はない。兄弟の存在自体は影響なく、

幼稚園の影響はCに対してのみである。

英単語のドリルに関する研究

東京大学 沢田慶輔・肥田野直・○神保信一
福島大学 羽鳥博愛

今回の研究はこれまで継続して行なつて来ている教科教育に関するものの一つであり、英語教育における単語面の諸問題の一つを明らかにしようとするものである。

生徒が新らしく学習する単語について、ドリルを手掛として検討した。新出単語を前もつて2つの方法でドリルをしておいて、後から3回、テストを行ない、ドリルをしなかつたクラスを含めて分析した。今回は公立中学校の3年生に限つたが、①単語を単独でドリルする場合と、contextの中に入れてドリルする場合とでは、方法上には明らかな差はみられなかつた。②ドリル方法の如何にかかわらず、ドリルをした効果は、非ドリル組との間に5%以下の危険率で有意であつた。③英語の学業成績が上位の者と下位の者についてみる時、上位の者にはつきりした差がないような場合にも下位の者、すなわち学業不振児といわれる者については、ドリルの効果が割合はつきりとあらわれて来る。

英語教育における心理学的一考察

東京都港区立城南中学校 岡田 春生

はじめて英語を教えた社会科の教師が(対象、公立中学校1年2学級、2年2学級、188名)従来の方法にとらわれず、心理的アプローチをこころみた結果、学力が上昇しつつあるという一種の事例研究であり、先ず個人差の把握には、表面の成績だけでなく素質から可能性をみることに着目し、団体知能検査2種類と内田クレペリン作業検査を併用して学力向上の可能性のある者をとらえ、知能的要因からとらえられぬ学業不振児にはレディネス(家庭学習・英語への既成観念)家庭環境(交友)の面を質問紙法により追究した。次には個人差によつて分けた上中下のグループに対する指導上の問題として、下位群は指導困難であるが、従来精薄児視された生徒でも、教師の無条件の受容的態度があれば、学力が中位にまで達すること、中位群に対しては、教科的技術よりは教師の個性、態度、人間関係が大きく影響すること、上位群には教科技術の指導が重要であることが明らかになった。また上位群は生徒の学習の受けとり方を、感覚型知識(記憶)型、論理型に分けて特徴に応じた指導をこころみた。

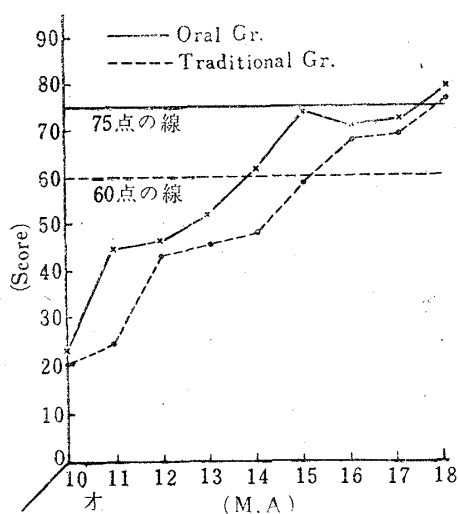
結論としては、初級の英語教育においては語学力だけでなく、指導技術と人間関係がより重要であることである。

英語学習のレディネス(その2)

名古屋大学 ○塩田芳久・増田末雄

この研究は①英語学習のレディネス要因の探究 ②レディネス年齢の推定、という2つの目的をもつてなされた。最初の問題については、すでに報告(応用心理学会26回)したので、ここでは第2の問題について報告する。

結果: 中学新入生4学級を対象として、2つの異なつた指導法(Oral と Traditional)による学習を1学期間指導した結果をMA段階別に示すと図のとおり、この他に



とができる。ここで、とくに注意すべき点は、指導法の条件を無視してレディネスの問題を云々することは困難であるということである。

中学生の学習興味 (3)

——縦断的研究——

岐阜大学 石黒 彰二

児童期から青年期へと、興味の過渡的な時期にある中学生について、その3年間に学習興味がどのように変化するか、またどのような原因で変化するかを調査検討して、興味変容の全体機制を明らかにしたい。これについては、従来多く一般に横断的方法によつて調査研究されているが、ここでは、縦断的方法によつて、従来の結果に再検討を加えたい。そこで教科学習に関する興味を、同一被験者について3年間継続調査し、学校生活の記録及び追想法による結果を照合して追及する。

1年から3年までの各調査につき興味の程度の相関を調べると、積極的相関はあるが、それほど高くはない。これは興味の変化があることを示すがその変化は一方向的なものであることは少ない。男女差はかなりみられる。個別的にみると、生徒のパーソナリティと教材内容、教師との人間関係、目的の認識などの原因がからみあつて教科好悪に影響していることが明らかとなつた。

小学校低学年の教育課程について

長野県豊野西小学校 和田 清

幼年期に属する低学年では教科別カリキュラムは不適切であり、統一的根源的な構造をもつものでなくてはならない。

その根拠は、パーソナリティーの構造体制が素質的力動的な相面の形成や、自覚的意志的な性格の面を見るに、ようやく深層において自我領域が形成されて来だしていることは認められるが、基本的欲求の感情的な刺激に対する反応の傾性や素質的能力及び容量の発達などから見て、パーソナリティーの力学的構造における中心化や抵抗性の体制や可塑性の面はまだ認められないし、領域間の境界には硬さがある。従つてこの期の行動調整の結構は依存的でかつもろいものであり、その発達課題は家庭から友達仲間へ進むことと、神経や筋肉を練つてのワーク

把持テストの成績が合格水準(かりに60点以上と75点以上の2つの水準)に達しているものの各MA段階別の割合を图示することもできる。(略)これらから英語学習に必要なおよそのレディネス年齢を推定すること

をすることであり、又おとなのもつ概念や技術の領域へ向かうとすることである。

このような発達課題を遂げさせる為の教育課程は生活経験を中核とした統一的・根源的な構造をもつものでなくてはならない。

大学生の知能と学業成績に関する問題 (その1)

山形大学 村田 明

I 現行大学における学生の学業成績判定の困難性

- 1 スライド法について
- 2 単位数(科目数)と科目毎の得点との比重について
- 3 本学部採用の方法について

II 大学生の知能判定について

III 本学部学生の進学適性検査、入学試験、大学卒業及び就職試験における成績の関係について

- 1 昭和〇年入学者について
- 2 同 女子学生について
- 3 同 進学適性検査との関係について
- 4 昭和×年入学者について
- 5 同 女子学生について

学級・幼児

学級内における対人的知覚の研究 (V)

福井大学 大橋 正夫

$p \cdot o \cdot q$ の3人からなる社会的場に含まれる三つの関係、すなわち R_1 (p の q に対する態度)、 R_2 (p の o に対する態度)および R_3 (q の o に対する態度の p による知覚)は相互に規定し合うものと考えられる。しかし従来のわれわれの研究においては、 R_1 および R_2 によつて R_3 がどのように規定されるか、という面が専ら扱われた。われわれの結果と Heider の仮説の喰い違ひ点のあつた一つの原因はここにあると思われる。そこで本研究では、従来のように q は o をどう思っているだろうかを p に質ねる代りに、被験者(小学校6年生)に対し、個人的に $q \cdot o$ を選定し、3Rの符号を予め刺激として呈示し、もしそれが事実と異なるならば適当に訂正することを求めた。このようにして構成された主観的な布置は安定性への強い傾向をもつことがわかつた。細部においてはその傾向は従来のわれわれの結果とも Heider の仮説とも異なるけれど、かなり一貫した法則性が見出された。

選択行動の研究 (I)

——友人選択の知覚について——

広島大学 酒井行雄・〇小川一夫・倉盛一郎

問題:(1) Choice 及び Rejection が学級集団のメンバーと教師からどの程度知覚されるか、(2)その可視性を規定する要因はなにか、を究明する。

研究方法:小4、6、中2、3の男女別8集団を対象にSociometric Choice と Rejection (3名)を調べ、次にその推測を生徒相互及び教師から求める。

結果及び考察:

- (1) 生徒も教師も Chance 以上に知覚している。
- (2) Choice の方が生徒相互では可視性大である。
- (3) 生徒の場合には、Choice 及び Rejection の順位